

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 27 日現在

機関番号：33910
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2016～2021
 課題番号：16K02858
 研究課題名(和文) ブレンディッドラーニング時代における英語対面授業の意義と教師の役割に関する研究

 研究課題名(英文) Research on the Significance of Face-to-Face English Lessons and the Role of Teachers in the Era of Blended Learning

 研究代表者
 小栗 成子(Oguri, Seiko)

 中部大学・人間力創成教育院・教授

 研究者番号：70329671
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：ブレンド型英語教育が実践されるようになった近年において、授業準備の効率化やツール活用に関するハード的なノウハウは蓄積されてきている。しかしその一方で、ブレンド型教育時代における対面授業そのものや、教師の役割に焦点を当てた研究は充分ではないことに本研究は着目した。本研究においては対面授業の意義と教師の役割の変化に焦点を当てながら、対面授業と個別オンライン学習の最適化を目指した実践研究を続けた。2018年度には対面授業とオンライン学習を循環的に継続する循環型ブレンド型教授法の開発に至り、英語習得に意欲・関心がない擬似初心者も含め、学習の動機付けにどのように影響するかの研究を継続した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

eラーニングの導入をはじめ多様化する ICTの活用事例は数多く実践され、ブレンディッドラーニングが英語教育に与える影響についての研究も多い。授業準備の効率化、教員間の情報共有等のノウハウの蓄積が進展してきている一方で、対面授業の意義の変容、教師の役割の変化に焦点を当てた研究は充分とはいえない。そこで本研究は、ブレンディッドラーニング時代における対面授業にはどのような意義があるのか、ブレンディッドラーニングを通して学習効果を最大限にするために教師はどのような役割を担う必要があるのかを検討した。

研究成果の概要(英文)：Blended English education coordinating face-to-face lessons and online learning has become more common in recent years. Although some research findings have highlighted the use of LMS or how to make class preparation more efficient, research focusing on the changing roles of language teachers has not been sufficient. Through this research, we focused on changes in the roles of the teachers and the significance of face-to-face lessons in blended learning. In addition, we carried out action research on how to adapt materials to maximize the effects of blended learning. The development of the concept of cyclical blended learning in 2018 is of special note. Furthermore, it has led to additional action research to prove how that method affects motivation in learning even among students starting with a low aptitude for language learning.

研究分野：英語教育

キーワード：ブレンディッドラーニング 英語教育 教師の役割 対面授業の意義 教材の適合化 英語コミュニケーション能力 eラーニング活用 英語基礎力の定着

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

グローバル社会において専門分野で能力を発揮していくためには、英語母語話者のみならず世界の様々な英語使用者と英語を学業や就労環境での共通語として用い、意見・情報交換、相互理解できる英語コミュニケーション力が重要度を増し続けている。英語が得意で活躍するというのではなく、非英語専攻であったり英語に対してアレルギーさえ感じていたりする学生たちにとっても、今や海外駐在や外資系企業に勤務するといった形ではなく、国内での就労、あるいは国内の大学院での研究においてさえ、基礎的な英語コミュニケーション能力・姿勢が不可欠となっている。

かつての文法訳読中心の時代から、コミュニケーションアプローチ中心の時代を経て、反転授業への挑戦と、「使える英語」「通じる英語」の習得に向けた英語教育・学習方法に関する模索は30年以上継続している。インターネット活用が日常的となった現在では、英語を聞き・話す能力だけでなく、日常的に英語を読み・書く能力も必要が高まっており、英語4技能全ての習得は、従来以上にニーズが増加、複雑化しているともいえる。しかしながら、社会が求める英語運用能力がこのようにレベルアップし続けている時代に即して、英語学習者の意欲や英語運用能力が自然に高まったり、英語教授者の教授力が自然に向上したりすることは期待できない。

インターネットやeラーニングの導入をはじめ多様化するICTの活用事例は数多く実践され、ブレンディッドラーニングが英語教育に与える影響についての研究も多い。授業準備の効率化、教員間の情報共有等のノウハウの蓄積が進展してきている一方で、対面授業の意義の変容、教師の役割の変化に焦点を当てた研究は充分とはいえない。そこで申請者は、2014年度から実践中の理系学科のブレンド型英語カリキュラムを研究の対象として、ブレンディッドラーニング時代における対面授業にはどのような意義があるのか、ブレンディッドラーニングを通して学習効果を最大限にするために教師はどのような役割を担う必要があるのかを、検討することに着目した。

2. 研究の目的

近年、専門領域における学習・研究から大学院進学・就職にいたるまで、大学入学者の将来には英語を使ったコミュニケーション能力が、一層必要とされる社会になってきている。本研究課題は語学センター（2016年度当時）と理系学科が、2014年度から協働で構築しようとしていた英語教育プログラムを1つの事例として取り上げ、対面授業・オンライン学習のブレンド型授業の1つのモデルを提唱するものとした。時間割の制約がある中、大学での英語授業は週一回程度の開講が一般的である。そのような状況下であるからこそ、最大限の学習を達成させるための対面授業のあり方、英語の習得力を向上させるために効果的な教授法、そして教師の役割について考察・分析し、学習ニーズに適した大学英語教育の改善に資することを目的とした。

2020年度、2021年度については、新型コロナウイルスによる感染症予防対策のため担当授業が遠隔のみでの授業実践となった。本研究課題では、遠隔授業を最適化する手法の実践と考察、英語コミュニケーションに必要となるスキルの定着をめざした教授法の改善方法をさらに研究し、さらには本研究課題協力者である英語ネイティブスピーカー教師との協同授業実践体制の強化、協同的遠隔授業ならではの利点を最大限にできるよう協同授業実践方法や教師の役割を明らかにしようとした。

3. 研究の方法

本研究課題では、申請者が担当する2年間英語プログラムを一例として、アクションリサーチを行なった。英語授業における教材選定、アクティビティ構築方法、教授法、担当教員2名の間での連携について改善を重ね、授業実践記録を詳細にデータ化し共有、学期ごとに振り返りを行なった。

対象は2年間の英語プログラム受講者であり、さらにはその後大学院へ進学する者も含まれた。2016年度からは一学年約80人、二学年の授業ではおよそ160人、2018年度からは20人程度ずつの大学院生も研究対象に加えた。入学から英語プログラム受講後まで、そしてその後の彼らの英語学習の量と質、学習に対する姿勢の変容、英語力の定着度について、授業観察・アンケートによる意識調査・eラーニング教材の進捗状況・自主学習進捗記録・外部テストをもとに測定した。これらのデータに基づいて一理系学科の英語プログラムにおける効果的な教授法がいかなるものであるかを検討し、カリキュラムを改良、授業の質を向上させていく方法を探究し実践し、さらにその効果を考察するというアクションリサーチを行なった。さらに、本研究課題の後半はコロナ禍となったため、英語ブレンディッドラーニングにおける対面授業の意義のみならず、遠隔授業における英語授業の可能性や教師の役割についても実践を通して考察した。

4. 研究成果

本研究課題を通してまとめた成果は、毎年度国内外の学会にて発表、学内の教育研究ジャーナルに投稿し、海外での講演も行なった。各年度に焦点を当てたトピックは、次の通りである。

2016年度：

- (1) eラーニングのブレンドによる対面授業の意義の変容と教師の役割の変化
- (2) 発音トレーニング方法と発話に対するつまづきを減らすための方法
- (3) 英語学習に対して不安感や嫌悪感が強い学習者に対する足場かけの必要性
- (4) 学習や運用練習時間を最大限にするためのブレンド型教育の特徴と週一回の対面授業の質向上方法
- (5) 対面授業の質向上のための教師の役割と対面授業での言語運用練習時間を確保するための授業実践方法

2017年度：

- (6) 協働授業における授業計画・実践記録のクラウドにおける共有方法

- (7) 学習の動機づけのための足場かけと教材適合化および教師の役割
- (8) 英語力定着をめざす螺旋状の教授法と教員の役割
- (9) ブレンディッドラーニングスタイルの授業における教師の役割の変容

2018 年度：

- (10) 学習ターゲットを深化、定着させるための循環型ブレンド授業方法
- (11) 発話・リスニングに対する自信を向上させるための発音指導の順序と方
- (12) 循環型ブレンディッドラーニングにおけるアクティビティデザインと教授法

2019 年度：

- (13) 対面授業の質向上を目指した教材の適用化と教師の役割
- (14) 教師 vs AI の役割とその融合の未来
- (15) 対面授業の質向上のため学習者母語(日本語)を意図的に介在させた授業実践方法
- (16) 対面授業を活性化させるためのインストラクショナルデザインと教師の役割

2020 年度：

- (17) コミュニケーション力育成をめざした一年生英語遠隔授業デザイン

2021 年度：

- (18) 学習意欲の向上、自己調整学習能力の育成、英語基礎力定着をめざした教授法と教師の役割
- (19) 遠隔授業における動機づけや学習意欲、自己肯定感の達成と教師の役割
- (20) ブレンディッドラーニングとの比較に基づく遠隔授業のデザインと教師の役割

2016 年度からの研究を通して明らかにした概念を、2018 年度に図 1、図 2 のように表すことができた。それ以降は、このコンセプトに基づいて授業のさらなる質向上を試みた授業実践を目指し、教師の役割とは何かを探究し続けた。まず、授業デザインにおいて、直線的に学習が並びがちな従来の英語授業と比較し、学びを循環させ、螺旋状に持続させて授業が可能なのかどうかを構想し実践した。インプット(input)→実習(practice)→アウトプット(output)→インテイク(intake)は、直線上に並ぶことはなく、図 1 のように螺旋状に行ったりきたりを繰り返しながら、幅を広げられるのではないかという仮説をもとに、授業実践とその効果の検証を重ねた。

図 2 は、1 つの授業(Class)が自己調整学習(SRL=Self-regulated Learning)へとつながり、たとえば一学期目より二学期目、二学期目から三学期目へと長期的に循環して学びが広がっていくという授業イメージを表したものである。図 1、図 2 のようなコンセプト図は、先行研究においては表されているものにまだ出逢っておらず、海外の学会発表においても共感を多く得たところである。

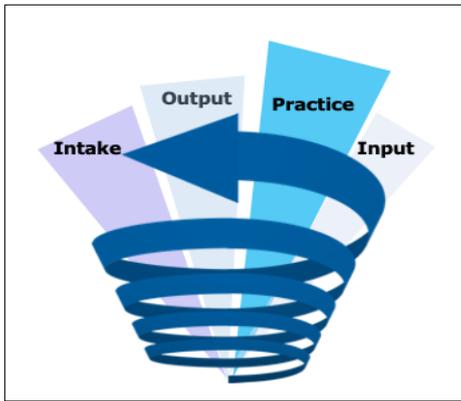


図 1 スパイラル型ブレンド教育のコンセプト
(Oguri et al. 2018)

本研究課題では、2018年度以降さらにこの2つのコンセプトをもとにブレンディッドラーニングを実践し、それにより一週間に一度しかない対面授業の充実と、オンライン教育のあり方を探究していった。

2020年度に訪れたコロナ禍により、ブレンディッドラーニングのうちの対面授業部分が削がれることになったため、本研究課題はそれまで研究の中心としていた対面授業のあり方から、オンライン教育のあり方へと重心を移すこととなった。

期せずして訪れたこの状況により得られたことは、どのような状況下にあっても、学習を止めないこと、授業がどのような形態であろうとも、何をどう効果的に教えるかを考えることや、学習意欲を向上させることができるような授業を実現させることこそ、教師の役割ではないかということである。Withコロナの時代であれ、Postコロナの時代であれ、学生と教材が持つ潜在能力を最大限に引き出し、適切な技術で学びの機会を強化 (enhance) していく時間が授業であることに変わりはないはずで、「1箇所に集まる価値がある授業」「次に繋がる授業」をデザインしていくことが、今後も教師の役割となっていくのではないだろうかと考え、次の研究において着眼していきたいという考えに至っている。

期せずして訪れたこの状況により得られたこと

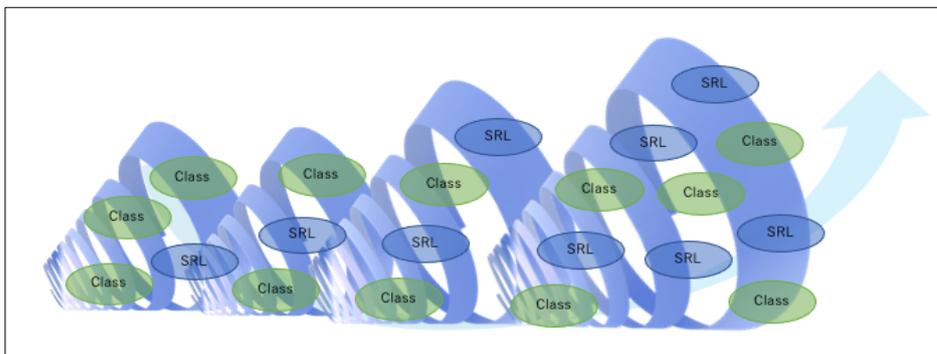


図 2 長期的なスパイラル学習の進行イメージ (Oguri et al. 2018)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 小栗成子他	4. 巻 20
2. 論文標題 ブレンドから遠隔への最適化 - コミュニケーション力育成をめざした一年生英語授業デザインの一例 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中部大学教育研究	6. 最初と最後の頁 53,67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Oguri S., Allen D.P.	4. 巻 19
2. 論文標題 外国語としての英語力定着に向けた教材の適用化とインストラクショナルデザイン	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中部大学教育研究No.19	6. 最初と最後の頁 9,23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小栗成子、高丸尚教、David P. Allen、加藤鉄生	4. 巻 17
2. 論文標題 英語ブレンディッドラーニングの実践と英語学習への意欲向上：理系学科における取り組みを一例に	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 中部大学教育研究 No.17	6. 最初と最後の頁 127、137
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小栗成子、高丸尚教、関山健治、デイビッド アレン、加藤鉄生	4. 巻 16
2. 論文標題 ロボット理工学科における英語コミュニケーション能力向上のためのカリキュラム-2年目までの実践と成果の報告-	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 中部大学教育研究 No.16	6. 最初と最後の頁 71,78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 11件）

1. 発表者名 Oguri S., Allen D.P.
2. 発表標題 Quality Time: Efficient practice through effective material adaptation
3. 学会等名 Pan-Pacific Association of Applied Linguistics (PAAL) 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小栗成子、Allen D.P.
2. 発表標題 ブレンディッドラーニングが叶える英語対面授業時間の活性化
3. 学会等名 私情協教育イノベーション大会2019
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Oguri. S.
2. 発表標題 AI or Us: Who Runs Our Language Classrooms?
3. 学会等名 2019 International Conference on English Language Teaching (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Oguri S., Allen D.P.
2. 発表標題 Two is Better than One: Using L1 in the L2 EFL Classroom Effectively
3. 学会等名 2019 TAIPEI TECH International Conference on Applied Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Oguri S., Allen D.P., Kato T.
2. 発表標題 Cyclical Blending: a Case Study of Implementation and Outcomes
3. 学会等名 Pan-Pacific Association of Applied Linguistics (PAAL) Conference 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Oguri S., Allen D.P., Kato T.
2. 発表標題 Confidence through Understanding: The Effects of Pronunciation Training on EFL Learners' Motivation and Aptitude
3. 学会等名 ICPEAL 17 - CLDC 9 Joint Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Oguri S., Allen D.P., Kato T.
2. 発表標題 Motivation and Intake: Creating English Learners through a Cyclical Blended Learning Model
3. 学会等名 CLaSIC 2018 - The Eighth CLS International Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小栗成子、David P. Allen、加藤鉄生
2. 発表標題 Up on the Cloud: Using Cloud Technology to Enhance Lesson Design
3. 学会等名 外国語教育メディア学会(LET)全国研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Oguri S., Allen D.P., Kato T.
2. 発表標題 Teacher Tailors: Enhancing Language Learner Motivation Through Material Adaptation
3. 学会等名 Pan-Pacific Association of Applied Linguistics (PAAL) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小栗成子、高丸尚教、David P. Allen、加藤鉄生
2. 発表標題 英語ブレンディッドラーニングにけるスパイラル的な教授法と教員の役割
3. 学会等名 私立大学情報教育協会教育改革ICT戦略大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Oguri S., Allen D.P., Kato T.
2. 発表標題 Weaving Learning Opportunities: Changing Teacher Roles in Blended Learning
3. 学会等名 The Applied Linguistics Association of New Zealand (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Oguri S., Kato T.
2. 発表標題 Breaking the Silence: Between Prosody Focused Training and Listening Skills Development for Beginners
3. 学会等名 JALT Computer Assisted Language Learning Special Interest Group(JALT CALL) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Oguri S., Kato T.
2. 発表標題 Turning Anxiety to Hope: The roles of teachers in a new blended EFL learning
3. 学会等名 The 21st Conference of Pan-Pacific Association of Applied Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Oguri S., Allen P., Kato T.,
2. 発表標題 Practice in Practice, Not in Theory: How blended learning supports intake in EFL classes
3. 学会等名 The Seventh CLS International Conference CLaSIC 2016 (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 小栗成子
2. 発表標題 ATR CALL BRIXが破る沈黙の意味-ICTにしかできないこと, ICTにはできないこと-
3. 学会等名 内田洋行 Education Expo (招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 小栗成子
2. 発表標題 英語コミュニケーション力育成のための足場かけ-英語嫌いをアクティブラーナーへ-
3. 学会等名 内田洋行 大学・高校実践ソリューションセミナー (招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 小栗成子、高丸尚教、関山健治、デイビッド アレン、加藤鉄生
2. 発表標題 理系学科における英語教育モデルの再構築： 2年目までの成果とこれからの課題
3. 学会等名 私立大学情報教育協会 教育改革ICT戦略大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	加藤 鉄生 (Kato Tetsuo) (20762313)	中部大学・人間力創成教育院・講師 (33910)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	アレン デイビッド パトリック (Allen David Patrick)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------